〔解答〕

1・2 2点×10　3・4〔問1〕～〔問4〕・5 5点×14　4〔問5〕 10点）

1 (1) だっかん　(2) くわだ(てる)　(3) いたく　(4) やっかい　(5) すす(める)

2 (1) 縮(む)　(2) 悲劇　(3) 雑穀　(4) 額　(5) 順延

3 〔問1〕 ウ　〔問2〕 ア　〔問3〕 イ　〔問4〕 ア　〔問5〕 エ

4 〔問1〕 エ　〔問2〕 イ　〔問3〕 イ　〔問4〕 エ　〔問5〕 別ページの解答例参照

5 〔問1〕 撰者たちは　〔問2〕 ふくらみや広がり　〔問3〕 エ　〔問4〕 いさよひに　〔問5〕 ア

〔解説〕

3 〔問1〕 刺繍(ししゅう)をたどる手つきを真似(まね)て笑われたとき、「僕」は不快に思っていただしたが、くるみに気にしなくていいと言われたときの反応からは、不快感を引きずっている様子はうかがえない。「慣れてる」という言葉が示すように、「僕」は同様のことを何度も経験し、**学校では目立った個性は受け入れられない**ものだと思い知っている。**からかいの対象になるのは不快だ**が、学校では異質なものがうとまれる傾向にある以上、手芸を趣味とする**自分が浮いてしまうのは仕方がないと諦め、やり過ごしている**と考えられる。

〔問2〕「つるつるのぴかぴかに」なるまで磨き上げた石を思い描き、「ほんまにきれいになんねんで」と言って頬を上気させている様子から、**くるみの気持ちが高ぶっている**ことがうかがえる。くるみは放課後のすべての時間を使って石を研磨するほど「石が好き」だが、「僕」にも石の魅力を理解してもらおうと躍起になっているわけではない。「僕」の質問を受けて、好きな石の話をしているうちに、**石を研磨するときの喜びや石の美しさが思い起こされ、気分が高揚してきた**のである。

〔問3〕 このとき「僕」は、宮多(みやた)に「**刺繍するのが趣味**」だと打ち明けようとしている。だが、「僕」はこれまでの経験から、自分の思いを「**わかってもらえるわけがない**」と思いこんでおり、刺繍が好きだと告げれば、**宮多から敬遠され、学校で孤立するだろう**と予想している。「僕」は**自分の趣味を話そうと決意しているが**、その結果、**周りから孤立するさびしさや苦しさを思って不安を感じ、緊張で指が震えている**のだと考えられる。

〔問4〕 これまで「僕」は、どうせ誰にもわかってもらえないと決めつけ、自分の好きなものを好きだと伝えようとしてこなかった。だが、宮多とのやり取りを通して、自分の思いをきちんと伝えれば、受け入れてもらえるのだと気づいた。魚の跳躍が波紋を広げ、風で波打った水面(みなも)がまぶしく光る、という**次々と連鎖して動いていく情景**は、**自分から思いを伝えれば、相手に受け入れてもらえる**と気づいた「僕」の心情に重なっている。

〔問5〕 くるみと話すなかで、**確固たる意思を持って好きなことに取り組む**彼女の姿に「僕」は心を動かされ、**わからないことに触れる楽しさ**にも気づかされた。さらに、宮多とのやり取りを通じ、**自分をわかってくれる人はいる**し、**自分も人のことを知ろうとしていなかった**と思い至った。靴紐(くつひも)を結び直しながら、ドレス作りに思いをはせ、宮多にゲームのことを尋ねようと考える「僕」の様子に、**好きなものを追い求めようという決意**や、**周りの人と率直に向き合い、関係性を深めていこうとする前向きな気持ち**が表れている。

4 〔問1〕 第二段に例示されている日常的な会話には、軽いやり取りだけでなく、ときに厳しいやり合いもあるが、第五段で筆者は、それらの**会話は互いの要望をすり合わせる交渉**であり、**互いの関係を保ち理解し合おうとする交流**だと述べている。一方、**対話**は「真理を求める会話」であるとし、「**何かの真理を得ようとして互いに意見や思考を検討し合うこと**」だと述べている。

〔問2〕「そうした態度」とは、難しい議論は人任せにし、自分は個人の生活を

守り楽しもうとする態度である。筆者はこうした態度を否定的に捉え、もはや私たちは**公共の問題に無関心ではいられないし、個人のあり方についても見直したいと思っている**と指摘している。第十五段で筆者は、「現代社会は、すべての人がそれぞれに真剣に取り組まなければならない共通の課題に直面している」と述べており、**すべての人々が公共の問題や個人のあり方についてそれぞれに真剣に向き合い、議論を重ねていく必要がある**と考えている。

〔問3〕 筆者は、対話を困難にする要因を指摘したうえで、第十段以降の四つの段落で、そうした困難に対峙し、対話が実践されている**具体例を挙げている**。第十四段では、**その具体例の内容をまとめたうえで**、こうした態度のなかでこそ素晴らしい創造性が生まれるという**筆者の考えを述べ**、異質な人々同士が粘り強く対話することが必要だという第十五段の**結論につないでいる**。

〔問4〕 筆者は、自身の留学時の体験から、**文脈や枠組みの違う考えが出会い、対峙すること**で混沌が生じるが、混沌のなかでも**人々が問題を共有し、真理を求めて議論すること**の必要性に思い至った。議論の場で結論が得られるとは限らないが、**共通の問題に対して皆で対話を重ねる**ことで、さまざまな考えに出会い、各自が自身の考えを検討することになるため、**互いに思考が深まり、それまでの自分のあり方を変えることができる**と筆者は考えている。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

5 〔問1〕 『古今集』を「形成した」のは、「撰者たちは」である。「一文節で」と指定されているので、「撰者たちは」を抜き出す。

〔問2〕 筆者は、和歌は「置かれた場面や文脈によって**多様な意味**を持つことができる」とし、それを「**歌の生理**」と呼んでいる。それが、歌集を編纂する際は、「**歌集の論理**」に基づいて「多角的に分析」され、「一定の解釈」を施されて歌集の中に位置づけられる。**歌は本来多様な意味を含み持つ**が、歌集の論理に収まらない「**ふくらみや広がり**」は削ぎ落とされるのである。

〔問3〕 筆者は、素性法師の歌の「女」が待った期間は、「A一夜待つ」、「B秋の終わりまで待つ」の二通りに解釈できるとし、『古今集』では「Aの『一晩中待ちつづけた』歌として捉えている」と推測している。そして、その根拠として、『古今集』の中で、素性法師の歌の**前後に「恋人の訪れを『期待して待つ女』の歌が並んでいる**」ことを挙げている。Aの解釈のように**一晩中待っていた**場合は男の訪れへの期待が感じられるが、Bの解釈では「もしかしたら二度と来ないのかもしれない」という思いが強く感じられる。よって、『古今集』の位置づけからは、「女」は**一晩中待っていた**と読み取れる。

〔問4〕 あとに解説されているように、「いさよひ」は「**ためらう**意の動詞『いさよふ』と『十六夜』の掛詞」である。1の歌の「**ためらっているうちに**」と「**十六夜の月も出て**」は、ともに「**いさよひに**」の現代語訳にあたる。

〔問5〕 歌は本来「**意味の多様性**」を含み持っているが、歌集を編纂するなかで、「**一定の解釈**」を施され、歌集の中に位置づけられる。こうして位置づけられた歌は、「歌集の論理の中で、**並び合う歌々と共鳴し合う**ことによって、**一首の意味が確定される**」のである。

漢字書き取りのポイント

(1) 縮 ×宀 はねている
(2) 悲
(3) 雑
(4) 額
(5) 劇 ×厂 折れていない / はねなし ×
(6) 穀 ×土 / ×八・儿 上が開いている
(7) 順
(8) 延 ×正 左から右 / ×正 反転 / ×乏 交わっていない / ×乏 丸くつながっている

第1回(9月) 作文解答例

今回の作文のポイント

(1) 問題の文章を読んだ後、「それまでの自分のあり方を変える対話」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。

(2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

1 字数…百四十一字以上は**減点なし**。百四十字~百一字は**2点減点**。百字以下または二百一字以上のものには**得点を与えない**。

2 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】
〈内容〉…「自分の意見、主張」がある。(4点) /「筆者の主張」を踏まえている。(3点) /「具体的な体験や見聞」がある。(3点)
3 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】
〈内容〉…本文の抜き出しや要約。(10点減点) /論旨に一貫性がない。(2点減点)
〈表記〉…句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点) 二つ以上ある。(2点減点) /最後の一文が途中で終了。(1点減点)
〈言葉の特徴やきまり〉…不適切な箇所が一つある。(1点減点) 二つ以上ある。(2点減点)

段落の頭は一字空ける。必ず守ること!

①	先	月、	リ	モ	ー	ト	討	論	会	に	参	加	し	ま	し	た	。	②	全
国	各	地	の	中	学	生	が	参	加	し、	活	発	に	話	し	合	う	な	
か	で、	住	む	地	域	や	生	活	環	境	の	違	い	を	反	映	し	た	
さ	ま	ざ	ま	な	意	見	が	出	さ	れ	ま	し	た	。	③	自	分	と	は
な	る	視	点	か	ら	出	さ	れ	た	意	見	に	触	れ、		それ		まで	
の	自	分	の	考	え	を	見	直	す	き	っ	か	け	と	な	り	ま	し	た。
④	人	は	そ	れ	ぞ	れ	違	う	考	え	を	持	っ	て	い	ま	す	。	⑤
ま	ざ	ま	な	人	々	と	対	話	を	す	る	な	か	で、	多	様	な	考	
え	に	出	会	い、	それ	まで	の	自	分	の	あ	り	方	を	見	直			
し、	更	新	し	て	い	く	こ	と	が	で	き	る	と	思	い	ま	す	。	

200 100 20

こういう場合、、や。や」は改行せず、行の末尾に入れる。

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞→意見」の形か、「意見→体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞→意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験・見聞」を簡潔に書く(①~③)。そして、その「体験・見聞」についての「意見」を書く(④・⑤)。右の作文のように、「さまざまな人々と対話をするなかで、多様な考えに出会い、それまでの自分のあり方を見直し、更新していく」という意見につながる体験・見聞を述べると、筋の通った文になる。「意見→体験・見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験・見聞」を具体的に述べる。

〔解答〕

1・2　2点×10　3・4〔問1〕～〔問4〕・5　5点×14　4〔問5〕　10点）

1　(1)　たよ(る)　(2)　ゆうぎ　(3)　けいしょう　(4)　かえり(みる)　(5)　けいちょう

2　(1)　博(す)　(2)　領域　(3)　減税　(4)　貸(した)　(5)　貧弱

3　〔問1〕　エ　〔問2〕　ウ　〔問3〕　ア　〔問4〕　ウ　〔問5〕　エ

4　〔問1〕　エ　〔問2〕　ウ　〔問3〕　イ　〔問4〕　イ　〔問5〕　別ページの解答例参照

5　〔問1〕　ウ　〔問2〕　ア　〔問3〕　瑞々しい感動　〔問4〕　光ことごとしき星のおほきなる　〔問5〕　ウ

〔解説〕

3　〔問1〕　マチは、「リーダーなのに、やる気あるのかな」という**琴穂**(ことほ)**を非難する声**を耳にして気にしていた。それなのに**琴穂は遅刻したことを反省するでもなく合唱とは関係のない話を始めた**ので、思わず「ちゃんと練習、しようよ」と言ったのだ。このときの「冷たく」聞こえる口調から、**真剣に練習しない琴穂に対するもどかしさやいらだち**がうかがえる。また、マチは、アルトの女子の歌声に比べて、**自分たちソプラノはまとまりがない**と感じている。パートリーダーである琴穂が真剣に取り組まなければ、みんなの気持ちはまとまらず、**合唱がうまくいかないのではないかと不安を感じた**のである。

〔問2〕　このあとマチが書いた手紙の文面からわかるように、マチは、自分の性格を「**臆病**」だと思っている。だから「まじめないい子」と言われて感謝されても、素直にうなずくことができない。また、「琴穂のことが気がかりだった」とあるように、マチは自分から注意されて沈んだ様子の琴穂のことを気にしている。**本当は臆病な自分が「まじめないい子」と受け取られてまどいを覚える**とともに、**琴穂を傷つけたと思って心を痛めている**のである。

〔問3〕　マチにとって図書室は、「**本と紙の匂いに包まれた大好きな場所**」であり、見えない文通相手と本心を打ち明け合える場所でもある。この日、マチは「同じ教室の中で琴穂と気まずい時間を過ごし」ていたことを、友だちのみなみにも打ち明けられずに抱え込んでいた。そんなとき安心できる場所に入ったことで**緊張がほどけ**、気まずくなってしまった琴穂との関係についての**悩みや苦しさが込み上げてきて**、泣き出しそうになったのだと考えられる。

〔問4〕　マチは「はっきり言えない」自分の性格を否定的に捉えていたが、文通相手はそれを肯定し、強さだと受け止めてくれた。マチが手紙を読んで「胸がぐっと熱くなった」と感じ、翌朝自分から琴穂に「おはよう」と言うことができたのは、**手紙に勇気づけられた**からだと考えられる。手紙を「**お守りのように**」胸に抱き、「**あたたかく熱を持っているように感じた**」とたとえを用いて描くことで、**手紙に勇気づけられたマチの様子が印象的に伝わってくる**。

〔問5〕　琴穂はマチから注意されたあと、普段通りに振る舞っていたが、マチとの間の気まずさは残ったままだった。しかし翌日、マチのほうから「おはよう」と声をかけてくれ、リーダーとして積極的に合唱の練習に取り組もうとテープを借りてきたことにいち早く気づいて、「ありがとう」と言ってくれたのである。琴穂の「**照れくさそうに**」マチから目をそらした様子から、**面と向かって「ありがとう」と言われたことを気恥ずかしく思いつつも、自分の姿勢を認めてもらえたと感じてうれしく思っている**ことがうかがえる。

4　〔問1〕　筆者は、日本において「『伝え合い』の内容と『刻(とき)』のズレ」が激しくなった主な理由として「**高度に発達したマスメディアが国全体を覆ってしまった**」ことを挙げ、「**マスメディアが作る情報を、ナマの現実よりも現実感をもって信じる**」ようになったからだと説明している。第五段の例では、現実のさまざまな「旬」は早かったり遅かったりするものだが、現代の日本

人は**マスメディアによって作られた情報を現実だと捉え**、予定された通りに「旬」が廻ってくると思いこむようになっていることを示している。

〔問2〕 それまでの段落で述べられていた、「伝え合い」における「時間」のズレという内容を受けて、第七段では、「伝え合い」と「時間」の関係を考えるにあたってもっとも重要なこととして「時間」の用法という**新たな観点を提示して**、時間の使い方について**説明を加え**、**論の展開を図っている。**

〔問3〕 「『時間』の用法の変化」について、筆者は、「盆踊り」や「音楽」を例に挙げて説明している。本来、「盆踊り」も「音楽」も、**「緩やかな時間の流れ」**の中で行われるものであり、始まりや終わりの時刻は**その場の状況に応じて変わっていた**が、次第に**「客観的に計られる時間」に制約される**ようになった。その基準となったのは**「経済的な効率」**である。従来は**それぞれの社会において、その場の状況に即した時間の使い方**をしていたが、**経済効率を優先する**ようになった結果、**客観的な時間に縛られるようになった**のである。

〔問4〕 第二段で筆者は、「伝え合い」は、「本来は『その人』、『その時』、『その場』の状況に『そぐう』ものであった」と述べている。しかし、「間接的な『伝え合い』」では、人・時・場の状況といった要素は抜け落ちてしまう。筆者は、**本来「伝え合い」は、相手との関係、時間や場所の状況なしでは成り立たない**が、**それを認識していない人が増えている**ことを危惧している。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

5 〔問1〕 直後の文で筆者は、古典文学時代の「旅」は、基本的に徒歩なので**「時間もかかり」**、「永遠の別れになる」こともあるほどの**「危険も伴」う**ものであったと説明している。また、いつの時代の旅も、**「新たな発見や驚き、冒険の喜びや苦労**を私たちに与えてくれる」と述べている。

〔問2〕 傍線(2)と**イ**~**エ**は、**断定の助動詞「だ」**。**アは形容動詞「静かだ」**の活用語尾。

〔問3〕 筆者は、「あをによし……」という歌は、「平城京の活気に満ちた様子を目の当たりにして、感慨を込めて詠んだ一首」だと述べている。また、「新しい首都」である鎌倉の様子を記した『海道記』は、「活気に満ちた新都市鎌倉の様子を観察し、生き生きとした筆致で描写して」いると述べ、その筆致は「瑞々しい感動」に満ちていると指摘している。両作品とも、首都の**「活気に満ちた」**様子から受けた感慨・感動を描写していて、その様子が**「生き生きとした筆致」**で鮮明に描かれ、**「瑞々しい感動」**が伝わると筆者は考えている。

〔問4〕 **「格別に強い光を放つ大きな星**が、夜空いっぱいに広がっていた」の部分を、現代語訳では「強い光を放つ星が一面に出ている」と表している。古文の、この現代語訳に相当する箇所は、**「光ことごとしき星のおほきなる、**むらなく出でたる」である。「ことごとし」は「大げさな様子」の意で、ここでは光が非常に強いことを表している。

〔問5〕 建礼門院右京大夫の旅について筆者は、「日常から離れた旅先での風景が、**新たな発見と深い物思いをもたらしている**」と述べ、「この旅が、**自己回復**につながっていった」と考えている。大切な人たちを出家や死別で失った深い悲しみを抱えて旅に出た右京大夫は、**旅先で初めて星空の美しさに気づいて強く心を動かされた。**さらに、その感動に誘われて物思いを巡らすなかで、**その深い悲しみが癒やされた**のだというのである。

第2回(10月) 作文解答例

今回の作文のポイント

(1) 問題の文章を読んだ後、「『伝え合い』で気をつけること」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。

(2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

1 字数…百四十一字以上は**減点なし**。百四十字～百一字は**2点減点**。百字以下または二百一字以上のものには**得点を与えない**。

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞→意見」の形か、「意見→体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞→意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を書く(①～③)。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く(④・⑤)。右の作文のように、「時と場、相手なども考えて行う必要がある」という意見につながる体験や見聞を述べると、筋道の通った文になる。「意見→体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を述べる。

第3回（11月）

2021T3-11②

〔解答〕

1・2　2点×10　3・4・5　5点×14　4〔問5〕　10点）

1　(1) しゅんびん　(2) と(る)　(3) わずら(わす)　(4) もうら
(5) らんかく

2　(1) 幼(い)　(2) 地層　(3) 農薬　(4) 羊毛　(5) 借(りた)

3　〔問1〕ウ　〔問2〕ア　〔問3〕ウ　〔問4〕イ
〔問5〕エ

4　〔問1〕エ　〔問2〕イ　〔問3〕ウ　〔問4〕ア
〔問5〕別ページの解答例参照

5　〔問1〕ウ　〔問2〕ア　〔問3〕エ　〔問4〕ウ
〔問5〕イ

〔解説〕

3　〔問1〕「こども飯」をやめないかと言われた父が、「学校で、何か言われたのか？」と聞いたのに対し、心也は「言われたわけじゃない」という曖昧な否定の仕方をした。それを受けた父の反応が傍線(1)だ。後で「**嘘が下手なのな**」と言い、「自分から進んでやめたんじゃなくて、**どこぞの部外者の言葉に屈して『こども飯』サービスをあきらめた**」場合のことをイメージさせているように、手段はともかく、**他者からの何らかの言葉を受けて**心也が「こども飯」をやめることを切り出したのだとすぐに感づいたのである。

〔問2〕あとに「**すでに胃のあたりが重くなっていた**のだ」とある。「『こども飯』をやめた俺と、その後の食堂をイメージしてみろって」と言い、畳みかけるように「自分から進んでやめたんじゃなくて……そうなった店に学校から帰ってくる自分のこともな」と続ける父の言葉を聞いた時点で苦しさを感じ、想像する必要もないほど、「**こども飯**」**の大切さを改めて認識している。**

〔問3〕父は「俺は自分の意思を尊重しながら生きる。やりたいようにやる」と言い切った。「こども飯」をやめることを切り出しながら、実際にやめるとなると抵抗も感じる心也だが、それはともかくとして、父の宣言からは状況がどうであれ「**俺の意見は流される**」ということを感じた。直後に「言葉にならないもやもやが胸のなかで膨らみはじめた」のは、**息子である心也の意見を検討すらしないことに対するやりきれなさ**があったからである。

〔問4〕「自分の意思を尊重しながら生きる」という父の思いを聞き、心也は「言葉にならないもやもやが胸のなかで膨らみはじめた」状態だ。そんなとき、「心也が不幸になると、自動的に俺も不幸になっちまう」「心也が不幸になるんだったら、俺は『こども飯』をやめるよ」と父が思いもよらない「意思」を伝える。それを受けて心也は、**父の言葉を心で咀嚼する**。思いがけない言葉を耳にしたときの時間の進みが、「**時計の秒針と雨の音がやけに大きく聞こえはじめた**」という聴覚がとらえた様子で表現され、驚きや戸惑いで何もできない心也の状況を印象付けているのだ。

〔問5〕「こども飯」をやめるかどうかに心也が不幸になるかどうかが関わっていることを聞き、「なんだよ……やめるのかよ」と心也は思っているが、このとき心也は本当の意味で不満を感じてはいない。「鼻の奥がツンとしてきそう」なのは、**父の愛情を意識して泣けてきそうなこと**を表しているのであり、強い口調で「やめるのかよ」と心の中で父を責めることで、泣きたい気持ちを押し殺しているのだ。**愛情を感じたからこそ**「正直、**少し息苦しいほど**」もやもやしているのである。

4　〔問1〕第一段では、ロボットの古典的なイメージとして「自立して動き回れる程度の自己制御能力を備えた機械」と「人間が遠隔操作する機械」を挙げたうえで、「実現しつつあるのは、そのどちらでもありません」と述べ、**現在のロボットがどのようなものか**を説明している。それを受けて第二段では、「**今日のロボット・人工知能倫理学の主要課題**」**をまとめ**、第三段以降

で詳しく**現在の状況を認識させ**、第八段で改めて**論じるべき課題の存在に目を向けさせる**という流れになっている。

〔問2〕 筆者は技術革新の状況について、第四段で「ただたんに**顧客の選択に影響を与える**……とかいった**域を超えて**、新たなレベルに入り込もうとしています」と述べている。そのうえで「Amazonのレコメンド機能」の説明をふまえ、第六段で「**顧客を選択から解放する方向**」に向かいつつあるという考えを示す七段で「**消費者の選択を不要とする方向**」に向かいつつあるという考えを示す。そのため、傍線(1)のように述べたのだ。

〔問3〕 傍線(2)の「そうした買い物」は前の一文に示されている「生命線（ライフライン）」としてのサービスの購入であり、「普通の意味での買い物」は、後の「食糧、食材を買うとき」に代表される買い物である。前者の特徴として、「**特定の業者と一定期間契約したら**……**使いっぱなし**です」と述べている。後者の特徴として、「**個別のサービスの選択ではありません**」「**顧客との取引データを大量に集積し**……**業者の側から、顧客が好みそうなアイテムを提案する**」のが「レコメンド機能」である。

〔問4〕 購買行動は作り替えられつつあるが、ここで話題になっている「音楽・映像ソフト」は、「一括取引にはなじみにくい」。そのような場合に、**そのように女性の思いを受け止めていることがわかる点**を「男の可愛（かわい）げ」と述べているのだ。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

5 〔問1〕 歴史的仮名遣いでは、ワ行の「い」は「ゐ」、「え」は「ゑ」と表記するが、発音は「い」「え」となる。したがって「よしゑやし」の「ゑ」は「エ」と発音する。その発音どおりに表記したものが現代仮名遣いである。

〔問2〕 直後に「『萬葉（まんよう）百首』を選んだ人々も、その前の長歌を背景にしつつ採ったと思われる」とあるように、「ほとんど長歌と反歌で成り立っている」巻十三に収められている「馬買はば」の歌は、**長歌とその反歌を受けて作られたもの**であり、**それらを含めて味わうことで作者の思いや背景がわかる**のである。

〔問3〕 後に「鏡も領巾（ひれ）も、ともに女の持ちものの中では**ことに愛惜（あいせき）するもの**。貧しい暮らしの中で、**妻は母の形見をどんなに大切にしていたであろうか**」とあるように、本文の筆者は傍線(3)に示されている品物の大切さに目を向けている。それすら手放そうとする姿に、**妻の献身性を見ている**のである。

〔問4〕 注にあるように、**ウ**に使われている「我が背」という言葉は、女性が自分の夫などを親しみを込めて呼ぶ言葉。**ウ**は、**妻が夫の体を案じる内容の歌**である。

〔問5〕 本文の筆者は、「馬買はば」の歌の作者について「ユーモアのセンスがある」と評している。「〈おれが馬に乗ったら、お前は歩かなければならないじゃないか〉というのは**話をユーモラスにはぐらかした**」と説明し、その理由として「山城路（やましろじ）をつねに**歩いてゆくのは夫の側のみ**」だと述べている。さらに、「**夫は妻が鏡と領巾を日常愛着しているのを、よく知っていた**」からこそ「たとえ石を踏んでも二人で歩いていこうよ」と表現したのであり、

漢字書き取りのポイント

(1) 幼 — 幺（×糸）、力（×刀）

(2) 地 — 土、也（×乜）

(3) 農 — 曲、辰（×厂・辰）形、はねなし（×）

(4) 羊 — 丷、羊

(5) 借 — 亻、昔（上が下より長い）

(1) 菜 — 艹、采（×釆）、木（×木）

(2) 毛 — 毛（×毛）左から右、反転（×毛）、レ（×）

(3) 層 — 尸、曽（×曾）、云（×厶）をはらっている、田、土

第３回(11月) 作文解答例

今回の作文のポイント

(1) 問題の文章を読んだ後、「技術革新による変化」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。

(2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

1 字数…百四十一字以上は**減点なし**。百四十字～百一字は**2点減点**。百字以下または二百一字以上のものには**得点を与えない**。

段落の頭は一字空ける。
必ず守ること！

										①
最	近	、	直	接	店	に	出	向	か	ず
に	商	品	を	買	っ	て	い	ま	す	。
②	イ	ン	タ	ー	ネ	ッ	ト	を	使	う
と	、	履	歴	を	た	ど	っ	て	以	前
買	っ	た	も	の	の	サ	イ	ズ	な	ど
も	確	か	に	似	た	も	の	が	広	告
と	し	て	表	示	さ	れ	て	便	利	だ
し	、	買	っ	た	商	品	に	③	技	術
革	新	で	生	活	は	便	利	に	な	る
一	方	で	す	。	④	自	分	か	ら	動
か	ず	に	得	た	い	情	報	に	触	れ
ら	れ	ま	す	。						
⑤	そ	の	反	面	、	購	買	履	歴	な
ど	の	自	分	の	情	報	を	他	者	に
管	理	さ	れ	る	怖	さ	も	感	じ	ま
す	。	⑥	短	所	に	も	目	を	向	け
つ	つ	、	新	し	い	技	術	と	向	き
合	い	た	い	で	す	。				
200							100			20

こういう場合、
行の末尾に入れる。
「、や。や」は

〈体験（見聞）・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞→意見」の形か、「意見→体験や見聞」の形のどちらかがよい。（右の例は前者。）いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞→意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を簡潔に書く（①・②）。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く（③～⑥）。右の作文では、購買履歴が活用されることの便利さを体験に盛り込み、「自分の情報を他者に管理される」という短所にも目を向けている。このように体験と意見につながりがあると、筋道の通った文になる。「意見→体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を具体的に述べる。

2 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉…「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

3 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉…本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)

〈表記〉…句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点)　二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)

〈言葉の特徴やきまり〉…不適切な箇所が一つある。(1点減点)　二つ以上ある。(2点減点)

第4回 12月

〔解答〕

〔1〕・〔2〕 2点×10　〔3〕・〔4〕〔問1〕～〔問4〕・〔5〕 5点×14　〔4〕〔問5〕 10点）

〔1〕 (1) けいこく　(2) はなはだ　(3) きはく　(4) しゅう
(5) まど(う)

〔2〕 (1) 病(む)　(2) 横暴　(3) 費(やす)　(4) 拝借　(5) 温厚

〔3〕 〔問1〕 ウ　〔問2〕 エ　〔問3〕 ア　〔問4〕 イ
〔問5〕 エ

〔4〕 〔問1〕 エ　〔問2〕 ウ　〔問3〕 ア　〔問4〕 イ
〔問5〕 別ページの解答例参照

〔5〕 〔問1〕 イ　〔問2〕 ウ　〔問3〕 ア　〔問4〕 イ
〔問5〕 エ

〔解説〕

〔3〕〔問1〕 直後に「**平静を装(よそお)ったつもりだったが……気が動転してしまった**」と、このときの心理状態が描写されている。「母と私にとって、とてもとても大切な日……私の誕生日」を忘れていたことに気づき、電車内にもかかわらず「ああっ、しまった！」と「突然大声を出してしまった」。心の中で**誕生日を忘れていたことに対する焦(あせ)り**があるものの、車内の視線が集まって気まずいため、まずは**現状をやり過ごそうとした**のである。

〔問2〕 傍線(2)の前まで、毎年どのような誕生日の過ごしかたをしてきたか、「私」が振り返っている。「**楽しく、うれしく、幸せだった**」とあるように、特別な一日だったにもかかわらず、**忘れていたことが自分でも信じられない**。そんな思いが、傍線(2)やさらにあとの「……にしても」という逆接の表現に表れている。

〔問3〕 「私」は面接後にそのまま故郷の広島へと向かう。「車窓を流れゆく風景は、高層ビルの森から青々とした稲田に移り変わっていく」とあるように、次第に故郷へと近づいていて、普段ならそれに伴って気分も高揚するだろう。しかし**自分と母にとって大切な一日である誕生日を忘れていた**ことや、その要因となっている**就職活動の状況**などが引っかかり、**心が動かない様子**を傍線(3)のように表現しているのだ。

〔問4〕 傍線(4)は、誕生日に「閉店間際(まぎわ)にのれんをくぐった」ときの母の反応とそれに対する「私」の様子。「おめでとう」と言葉で祝福されてはいないが、**笑顔にこめられたその思いを感じ取った親子ならではのやりとり**が、「ボールは……ミットに収まった」という**キャッチボールにたとえることで表現されている**。広(ひろ)さんやスタッフ全員が声に出して祝福しているのとは対照的な様子だ。

〔問5〕 入り口のまえで店内の様子をうかがう「私」の目に映ったのは、「てきぱきと立ち回っている」母の姿である。「母の笑顔は不思議にまぶしかった」とあるように、**仕事を頑張る姿が輝いて見えている**。就職活動のことばかり考え、母と自分にとって大切な一日である誕生日を忘れてしまった自分は**とても会うことはできないと感じて、店内に入るのをやめた**のだ。

〔4〕〔問1〕 筆者が抱いてきた、哲学に対する「ネガティブなイメージ」について説明したうえで、たどりついた境地を端的に示したのが傍線(1)である。これについて、第七段で詳しく述べている。「私たちが生きている**この世界について、よりよく知ろう**ということ……**理解を深めることによって、この世界と、そしてそこに生きる私の仲間とどのように向き合うのかということを考える手がかりとなる**ことかもしれない」というとらえかたをするようになったのである。

〔問2〕 筆者が学生に出す「色の事例」から、「私たちの目の前の物体に色がついているという常識的な考え」とともに「物体それ自体には色はないという科学的な考え」が浮かぶ。「**対立さえあるように見える**」二つの考えである**どちらも正しいように受け入れている**」という事実があること

に気づける好例として「色の事例」を用いているのである。

〔問3〕第七段では、哲学がどのようなものか、筆者の考えが説明されている。「私たちが生きているこの世界について、よりよく知ろうということ」を意識させたうえで、第八段ではその「入り口」となる**物事との向き合いかた**が示されている。考え、疑問を持ち、さらに考えるということが哲学になっていることを伝え、**哲学を特別視しないで済むようにしている**のだ。

〔問4〕第八段で「ふと何か気になることがあれば、ぜひ**じっくりと考えていただきたい**」、「そういったことを積み重ねていくと、身の回りのことについて**多くの疑問が浮かび上がりやすくなる**」と説明したうえで、第九段で、「こう書くと、実は**ほとんどの人が哲学に少しは足を踏み入れている**と言えるかもしれない」と述べている。哲学という響きで「特別な行為」という印象を受けるが、実際は**誰もが経験のあるような行為が哲学の入り口となっている**ため、傍線(3)のように述べたのである。

〔問5〕別ページの解答例参照。

5 〔問1〕筆者は「『憂ひ』の方が個人的な感情に思えます。また程度からいっても、『憂ひ』の方が重いように感じます」と述べたうえで、「愁ひ」について、「**なんとなく若者特有のというか、原因不明の悩みのようなもの**に思えます」と述べている。そのうえで竹西氏の「私は**大差がある**と読むので、一句の中の一文字の重みは決していい加減にはできない」という言葉を引用することで、「憂ひ」と「愁ひ」の**違いに意味があることを印象づけている**。その具体的な違いについては、さらにあとの大岡氏の「**茫然とした青春の哀感と憧憬にほかならない**」という言葉を引用し、「みごとな解説」とたたえている。筆者が先に述べた「愁ひ」の印象を詳細に言い表したような表現だ。

〔問2〕筆者は、「『花いばら』という名の植物が存在するわけではありません」と述べたうえで、「花いばら」という言葉が登場する背景を説明している。**「江戸時代前期の寛文の頃、俳諧の世界でようやく『いばらの花』のことを『ばら』で代表させるようになった」**のであり、「蕪村がようやく『ばら』を**文学の対象に高めてくれた**」と考えているように、**歴史を感じさせ、「非常に現代的な俳句」と思わせる要因の一つ**として「花いばら」に注目したのだ。

〔問3〕「なまじ」は、「深く考えずに」「中途半端に」といった意味で使われる言葉である。「なまじ情けをかけたばかりに調子に乗ってしまった」などのように使われる。

〔問4〕正岡子規の短歌について述べた部分なので、「くれなゐの……」が何に注目している歌なのかを考える。「**薔薇の芽の針**」について歌っているものなので、「**花ではなく、棘**」を入れるとよい。

〔問5〕「蕪村がようやく『ばら』を文学の対象に高めてくれた」と述べたうえで、筆者はその**句を踏まえたものとして石川啄木の歌**を示し、さらに同様に「**ばら**」**を用いている歌として正岡子規の歌**を示している。「**ここまでくると、『ばら』もようやく韻文の世界で市民権を得ていることがわかります**」と述べているように、蕪村が「ばら」を「文学の対象」としてから、「**ばら**」が**用いられるようになった流れを示した**のである。

漢字書き取りのポイント

(1) 病 ×丙（「人」離れ）

(2) 横 暴 ×水（左が一画）

(3) 費 ×見

(4) 拝 ×はねあり 借 ×上が下より長い

(5) 温 ×温（「氵」と「皿」のバランス） ×皿（閉じ） 厚 ×厚（「厂」と「子」のバランス）

第4回(12月) 作文解答例

今回の作文のポイント

(1) 問題の文章を読んだ後、「哲学の入り口に立つ」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。

(2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

1 字数…百四十一字以上は**減点なし**。百四十字~百一字は**2点減点**。百字以下または二百一字以上のものには**得点を与えない**。

段落の頭は一字空ける。
必ず守ること!

									①
									友
									人
と	話	疑	自	で	③	学	疑	自	、
は	に	問	身	す	物	に	問	分	校
何	な	を	の	。	事	つ	を	の	則
か	っ	持	心	⑤	に	な	持	意	の
等	た	つ	が	考	つ	が	つ	見	見
、	こ	と	育	え	い	っ	と	を	直
疑	と	い	ち	る	て	て	い	聞	し
問	が	う	、	く	深	い	う	い	を
が	あ	こ	物	せ	く	る	こ	て	提
次	り	と	事	を	考	の	と	み	案
々	ま	の	の	つ	え	だ	の	た	し
に	す	繰	見	け	る	と	繰	い	た
浮	。	り	方	て	と	思	り	と	い
か	②	返	も	い	い	い	返	い	と
ん	最	し	変	き	う	ま	し	う	い
で	初	に	化	た	行	す	に	気	う
き	は	よ	す	い	為	。	よ	持	
ま	軽	り	る	で	は	④	り	ち	
し	い	自	は	す	、	考	自		
た	気	分	ず	。	哲	え	分		
。	持					、			

200　100　20

こういう場合、
行の末尾に入れる。
「、や。や」は

2 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】
〈内容〉…「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)
〈表記〉…句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)
〈言葉の特徴やきまり〉…不適切な箇所が一つある。(1点減点)／二つ以上ある。(2点減点)

3 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】
〈内容〉…本文の抜き出しや要約。(10点減点)／二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞→意見」の形か、「意見→体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞→意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を簡潔に書く(①・②)。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く(③~⑤)。右の作文では、校則の見直しの提案の話をきっかけとして、考えを深めたことを「哲学の入り口に立つ」体験として述べて、あとの意見につなげている。「意見→体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を具体的に述べる。

第5回（1月）

〔解答〕

1・2　2点×10　3・4〔問1〕～〔問4〕・5　5点×14　4〔問5〕　10点）

1　(1)　あら(い)　(2)　さえぎ(る)　(3)　くじゅう　(4)　せきひ
　　(5)　きろ

2　(1)　悲鳴　(2)　永住　(3)　隊列　(4)　老(い)　(5)　導(く)

3　〔問1〕　ウ　〔問2〕　イ　〔問3〕　ア　〔問4〕　エ
　　〔問5〕　イ

4　〔問1〕　エ　〔問2〕　ウ　〔問3〕　ア　〔問4〕　イ
　　〔問5〕　別ページの解答例参照

5　〔問1〕　イ　〔問2〕　エ　〔問3〕　ア　〔問4〕　ウ
　　〔問5〕　エ

〔解説〕

3　〔問1〕　館野が早馬にスポーツ栄養学を学ぼうとしているのかと問うと、「何故か小佐内先生が頷いた」。さらに、スポーツ栄養士を目指しているのかと確認すると「小佐内先生が『そうです』と頷く」状態である。この時点では**何のために問われているのかがわからないうえに、自分は返事をしていないのに会話が進んでいくことに対する早馬の戸惑い**が、「そう書いた。書いたけれど」という部分に表れているのである。

〔問2〕　早馬は自分の本来の訪問相手であった小佐内先生がどのような意識でこの場にいるのかを測りかねていたが、「**先生は、完全に館野側で早馬を勧誘しているのだ**」と気づく。先生の前で館野にどのように接するべきか判断がつかなかった早馬は自らの思いを明らかにしていなかったが、先生も早馬が駅伝部に所属することを勧めているのだとわかったことで見せたのが傍線(2)の様子である。直後に正直に思いを話して「選手達の大事な一年を使っていいわけがない」と断っているように、**素人の自分を勧誘する館野の様子に考えの浅さを感じ、伝えるべきことを伝えようと覚悟を決めた**のだ。

〔問3〕　傍線(3)の二文では、箱根駅伝の捉え方を「観ている側」と「選手」の側に分けている。「年に一度のお正月の風物詩」と「人生で四度しか走る機会のないレース」と**対句的に表現する**ことによって、**恒例行事の一つと、切実な舞台という違いがあることがわかりやすくなっている**のである。

〔問4〕　早馬は館野の誘いに乗りたい思いはあるものの、**選手のことを考えれば引き受けるわけにはいかない**と正直に伝えている。にもかかわらず、館野はさらに「**選手達にいい影響がある**」と話し、選手の卒業後にまで目を向けていることを説明してきた。断った理由に選手達への思いを挙げていた早馬としては、同じように**選手を思ったうえでの誘いであることを明かす館野の言葉に何も言い返すことができない**。直後の一文にも「だんだんと断りにくい気分になってくる」とあるように、**心が動き始めている**のである。

〔問5〕　前に、「高校生の自分だったら、この話に飛びついた。夢に近づく提案……心を躍らせた」とあるように、「ちょっと、考えさせてください」と**態度を保留した今の自分自身に昔との違い**を感じ、早馬は「少しは大人になった」と考えている。カステラを初めて作って差し入れたときに「スポーツ栄養士を目指す」と打ち明けた過去と、味噌入りの工夫を凝らしたカステラを作り栄養士の夢に近づきながら保留している今回との違いに、**自分の成長を感じた**のである。

4　〔問1〕　筆者は「文学国語か論理国語か」という選択について、「ツールとしてどちらがより良いか、という選択の対象」になると述べ、「**ツールという見方の上に立って発言する**」**ことを否定的に論じている**。第一段で「**問題の本質は……『ことばをツールだと思っている』ところにある**」と論じる筆者は、「文学国語か論理国語か」を論じる時点でツールとしての議論になっているのであり、文学国語に肩入れしようと、国語における区別の不適切さを述べようと、失敗する可能性があると考えているのだ。

〔問2〕「ツールとして役に立つことばは……身につけるべきだという理屈」について、「**効率という観点**だけ……そこで**目指されているのは労働力**」だと述べている。「**一番効率よく、仕事がたくさんできる人材**」を求めて「**ツールとして役に立つことば**」を**身につけさせようとする風潮**を、「道具扱い」されていると表現しているのである。

〔問3〕第十四段の最初にある「これ」が指すのは、第十二段から第十三段の流れで述べた内容で、「アルファベットと英語だけ使えれば、世界中で通用する」という発想から生じた、他の言語を「学ばなくてもよい……**英語だけ学べば十分だとする、すでに蔓延した考え**」である。第十四段ではこれを「大きな誤解」としたうえで、「**世界には英語が通じない地域、他の言語が共通語として重視される地域がたくさんある**……英語だけできれば世界中でコミュニケーションがとれるというのは、単なる幻想」だと述べることで、「すでに蔓延した考え」の**問題点を明確にしている**のだ。

〔問4〕筆者は「ことばがツールだとしたら……**ことばそのものが必要なくなってしまう**」と述べ、「ことばを大切にしないことで……私たち人間が長い間**ことばを通じて培ってきた価値**について、**非常に大切な部分が決定的に損なわれる危険がある**」と警鐘を鳴らしている。第十三段で、英語以外の言語を学ばなくてもよいという話になりかねないことについて「人文学にとっては危機」だと述べているように、**言語の消失や、ことばを通じて築き上げてきたものの崩壊を恐れている**のである。

〔問5〕別ページの解答例参照。

5 〔問1〕この文章では、漢詩の「黄鶴楼」に関係する説話を紹介したうえで、詳しい鑑賞が始まる。「上下二句ずつの四つの聯」に分けたとき、傍線(1)の二句は「頸」の部分にあたり、これについて鑑賞文の筆者は「仙人、黄鶴に対する**空想から眼前に広がる実景へと視線を変えた**」と説明している。

〔問2〕筆者は、傍線(2)の直後から説話の内容を紹介したうえで、「さて、**崔顥**が**『黄鶴楼』はこの説話から詠み起こされている**」と述べて漢詩の「黄鶴楼」について詳しい説明を始めている。「黄鶴楼」が作られる際に利用された説話を引用することによって、**漢詩の理解が進むと考えた**のである。

〔問3〕傍線(3)と**ア**は「……ほど」という意味の**程度**の「ばかり」である。**イ**は「……したばかり」という完了、**ウ**は「……だけ」という限定、**エ**は「……したせいで」という原因の意味になる。

〔問4〕傍線(4)は説話の一場面であるが、漢詩「黄鶴楼」においては前半部分にこれと同様の描写がある。鑑賞文の筆者はこれについて、「『**一たび去ってまた帰らず**』と言うのは、実は**過ぎゆく歳月を暗示している**」「**二度と戻らない歳月への愁嘆がひしひしとこめられている**」と説明している。

〔問5〕傍線(5)は、「黄鶴楼」における詩人の視線に着目したもの。「黄鶴楼から夕靄の立ちこめた長江を眺めて、崔顥は**心を遥か遠い故郷へと馳せた**」とあるように、視線がたどり着くのは目には映らない「故郷」である。

漢字書き取りのポイント

(1) 悲 鳴
- 「日」の一画目が出ているもので
- × 目・曰 「ノ」角度なし
- × 白・冒 逆・水平

(2) 永 住
- × 氷 左が離れ

(3) 隊 列
- × 阝
- × 歹 横画長すぎ
- はねなし ×
- はねあり ×

(4) 老
- × 耂 明らかに上の横画と交わっている

(5) 導
- × 辶 点なし・下と続いている
- × 辶 丸くつながっている
- × 辶 横画なし・ほとんど横

第5回(1月) 作文解答例

今回の作文のポイント

(1) 問題の文章を読んだ後、「ことばをツールと見なす発想」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。

(2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

1 字数…百四十一字以上は**減点なし**。百四十字~百一字は**2点減点**。百字以下または二百一字以上のものには**得点を与えない**。

2 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】
〈内容〉…「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

3 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】
〈内容〉…本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)
〈表記〉…句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点) 二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)
〈言葉の特徴やきまり〉…不適切な箇所が一つある。(1点減点) 二つ以上ある。(2点減点)

段落の頭は一字空ける。必ず守ること!

①	初	め	て	国	語	の	教	科	書	を	手	に	し	た	と	き	の	こ	と
	ば	を	今	で	も	覚	え	て	い	ま	す	。	②	様	々	な	物	語	に
引	き	込	ま	れ	、	一	気	に	す	べ	て	読	み	ま	し	た	。	③	それ
以	来	、	新	し	い	教	科	書	が	手	に	入	る	と	す	ぐ	に	読	む
よ	う	に	な	り	、	言	葉	が	織	り	な	す	世	界	に	引	き	込	ま
れ	ま	す	。	④	こ	と	ば	を	ツ	ー	ル	と	見	な	し	て	効	率	ば
か	り	求	め	て	い	く	と	、	味	わ	い	深	い	表	現	に	触	れ	る
機	会	を	失	っ	て	い	ま	す	。	⑤	様	々	な	こ	と	ば	に	触	れ
、	想	像	力	を	養	う	こ	と	が	心	を	育	て	る	こ	と	に	つ	な
が	る	は	ず	で	す	。	⑥	こ	と	ば	を	大	切	に	し	て	い	き	た
い	と	思	い	ま	す	。													

200　100　20

こういう場合、、や。や」は行の末尾に入れる。

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞→意見」の形か、「意見→体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞→意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を簡潔に書く(①~③)。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く(④~⑥)。右の作文では、国語の教科書の物語に引き込まれたことを体験として述べ、ことばをツールと見なすことで「味わい深い表現に触れる機会を失う」という考えを示している。「意見→体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を具体的に述べる。